

会員の声

47年度秋季大会の感想

OR論文の意外な特徴

「OR学会の発表論文は、どれも数式ばかりやたらに並んでいてさっぱりわからない」という人が多い。

ほんとうにそうであろうか。今大会の65件の論文では、数式の全然是りないものが15件(23.1%)もあったが、「どれも数式ばかり」と思うのは先入観ではなからうか。

なかには、数式の割合がとび抜けて大きく74%というものもあったが、全論文の平均では20%となっており、これはそんなに大きな値ではない。

たとえば、ウィルクス著・小河原正巳訳『数理統計学』(育文社)では、数式の割合はほぼ40%と思われるが、この半分くらいの割合ならそんなに読みずらく感じないと思う。

もちろん、数式などの割合だけで論文のよさは決まらないが、体裁面だけから考えると、数式が40%

を越える論文は、大部分が大学サイドのものであり、さらにこれを箱根を境にした東西の地域別にみると、関東20%、関西30%と大きく開いているのはおもしろい。

さらに数式だけでなく、図表などの割合も含めると図1のようになり、全論文中に占める割合の平均では、文章(64.4%)、数式(20.0%)、図(10.8%)、表(3.9%)の順になっている。

図1から、各サイド別の特徴を眺めると、大学(関西)サイドの論文は比較的図表が少ないのに対して、企業サイドでは数式が少なく、大学(関東)サイドはそれらの中庸をいっているように思う。

男性ばかりという味気なさの中に紅一点の花を咲かせるように、たとえ数式の割合が多くても、その中に図表がはいってれば見やすい論文になるように思うが、今回の論文の平均でみた特徴は、「図表と数式の割合の比較的少ない、したがって文章の割合の多い、いわば読みやすいが単調」というゾーンにはいっている。

この傾向は、いつの大会でもそれほど変わらないと思われ、このことは数式に弱い私自身にとって、今後の大会への出席意欲を高めてくれた。

「鷹も朋輩、犬も朋輩」という諺があるが、タカという数式と、犬という文章は一つの目的に対して、受け持つ任務の分担が異なり、しかも仲がよくないのに連帯感が要求されている。

今大会の論文の中には、この連帯感を彷彿とさせるような魅力的なものがいくつかあったが、内容の良さと呼応して読む者の心を打たずにはおかなかったと思う。

(電電公社 江副 力)

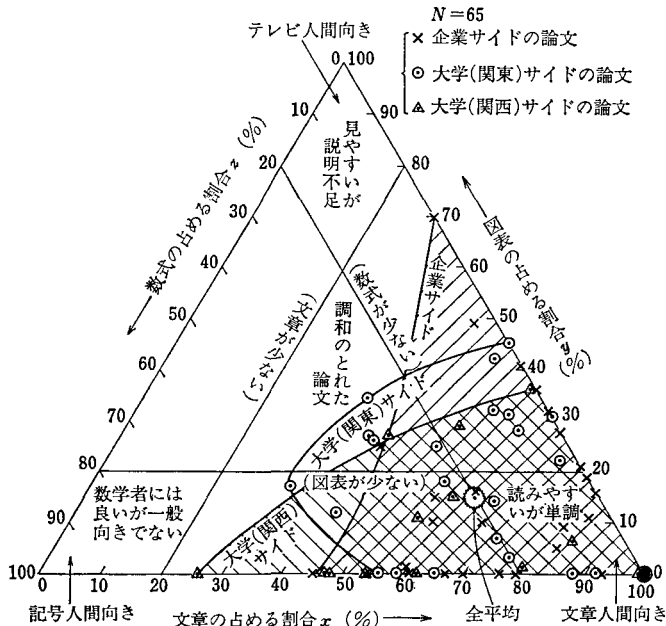


図1 個々の論文中に占める文章・図表・数式の割合

秋季研究発表会見たり聞いたり

大会ではまず、特別テーマ“公共性とOR”に関する発表および特別講演は、適切な発表者と題目が多くの参加者を一堂に集めて感銘を与える。ただ特別テーマの各講演時間が20分しかないのは、大会の充実のための時間の制約によるものだが、もう少し時間を増せないものかと思われる。

一般講演では、運営のお世話を願った北海道支部の方々により、いわゆる“夜店式”を採るという意欲的な試みが実行されたことを特筆せねばならない。この計画については早くから承知していたが、OR学会としては初めてのことであり、はたしてうまくいき、十分効果があるかということには、大きな期待とともに多少の不安をもっていたのは事実であり、多くの関心を集めていた。

夜店式会場の設営は、特別テーマ、特別講演のあとのわずかな休憩時間に、あわただしく二つの大会場の模様替えが行なわれ、八つの小会場に分割整備される。小会場を区切るものは簡単な衝立だが、それぞれに黒板、OHPが備えられ、聴衆用の30~40脚の椅子が用意される。

進行に当たり気づかれたのは、各小会場ごとに聴衆がうまく適当に平均して分散するだろうかということだったが、最初は多少の偏りがあったものの、やがて平均化の傾向をとったのは何よりのことである。そして従来と異なり、1題目に40分が当てられ、講演者はじっくり研究内容に触れることができ、比較的少数の聴衆と膝を交えるほど接近しているから、講演者の熱もこもり、聞くほうの身もはいるが、高潮するにつれ声高となつて、隣の小会場との間に干渉が起ることもあった。しかしこれも次の休憩時に多少の配置替えをすることで、各会場の独立性をできるだけ保つようなくふうがなされてかなりの改良がなされた。この点から、今後この発表形式を採るときは、世話する側で、この方法に十分理解があり、労力も十分提供しうる多数の人の協力を確保し、黒板、OHPなども十分な個数を用意し、円滑な進行のための細心な配慮も終始必要とすることを考えておかねばなるまい。

また、この形式は特定の講演を理解するにはたしかに適しているが、一面ではその小会場に釘付けできないという問題もある。これはプログラム編成に細心な配慮をすることである程度は解決されよう

が、やはり容易ではない。とくにORでは多くの分野にわたり広い知識を得ておくのが必要で、諸分野の研究に接しておくことがたいせつだから、できるだけ多くの講演を聞けるようにすることも望ましく、ここに今後の宿題が残る。

プログラム編成で、講演数を8会場に均等に分けるための分類の苦心の跡が偲ばれるが、やはり偏りは見られる。また電力で1部門が設けられたのは、まとまりがよいようだが、信頼性、長期計画、フォーの問題などが複数の会場で並行して行なわれて、参加者に不便だった面もあったであろう。

ともあれ、“夜店式”は一応成功というべく、これは北海道支部の絶大な努力によるもので、深く敬意と感謝の意を表する所である。

(九州大 三上 操)

魅力的な“学会”のあり方への第一歩

“学会”がおもしろくない、という不平はここかしこで聞かれる。研究発表会という意味に使われる“学会”に対する不満は、およそ学会である限りどこにでもある不平のようである。

その“学会”とは何であろうか。学会によって、また個人個人の評価によって多かれ少なかれ違ふであろうが、それはシンポジウムという面と祭典としての側面とを兼ね備えた何かのようである。私どもがおもしろくない、と思うのは祭典としての“学会”にも、シンポジウムとしての“学会”にもうまく参加できない場合に感じる不満のように思うが、どうであろうか。はるばる数百キロを旅して会場まで来たものの、顔見知りとは少なく講演はむずかしくて、会場のロビーでわずか数キロ離れた職場の知人を発見し、ついつい喋り込んでしまう、などというばかげた参加に終わることも稀ではない。

今回の札幌大会は、“学会”のシンポジウムとしての側面を機能的に強化しようとされ、たいへん有益な資料を提供してくださったと思う。できるだけ多くの会員から、今回の方式が持つ長所、欠点を指摘していただいて、発表会の望ましい姿を模索していきたいものである。

従来の、形式に陥りやすい発表方式を改め、時間的余裕のある、face to faceの討論という方式が採られたことは素晴らしいと思うが、この方式が理想的に動くためには、なお2,3の条件が必要ではないかと感じる。

一つは発表者の心構えであり準備である。私ども

は他人に語りかける方法についてとかく無関心であり、どうかすると無頓着であるほうがすぐれている、とすら判断しがちである。これは、大衆文学を軽んじて純文学を尊しとする私どもの体質と無関係でないのかもしれないが、難解をもって純粹・高級とし、読者や聴衆は難解に耐えるべしとする弊風は、もうそろそろ過去のものとしていいのではないであろうか。内容の無さを語り口で飾って聞かせるという手合いはもちろん困りものであるが、高級な思想をやさしく語るというのが私たちの理想である。そのために私たちは努力を惜しむべきでないし、この種の努力をお互いに評価し、尊重し合いたいと思うが、どうであろうか。

ORは学際的な仕事だといわれる。ORのモデル、ORに役立つ数学手法は、それが高度に洗練された数学構造をもっていても、そのアウトラインについては数学嫌いの実務家にも十分理解できるような説明が与えられることが望ましく、また、くふうによって、それは可能だと思う。また、実務家のすぐれたケース・スタディは巧みな解説によって、オペレーションにうとい数学者にも十分理解され、より有効な手法を発想させる刺激となると思う。

とはいっても、発表者の多くは一般のタレントではないので、努力しても聴き手を誘い込むことに成功しないことがある。より多くの人々が討論に参加されるようにするためには進行係がいてよいと思うがどうであろうか。これは昔風にかめしい座長ではなく、もっと気軽な役割のほうが良いであろう。あるいは討論予定者をあらかじめ指名しておくという方法もあるだろう。討論者は、その余裕があれば、さらに他の人たちの発言を誘い出すような質問をするのが良いと思う。

1975年のIFORS会議はワーク・ショップ中心に進行の予定と聞いているが、私たちの春秋の発表会もこの方式でしばらくやってみてはどうであろうか。将来性のある方式だと思われるので、

(防衛大 岸 尚)

秋季大会の新方式に関する感想

秋季大会の一般報告でとられた新方式について感じたことであるが、まず一般報告が行なわれたホールは少し小さかったのではないだろうか、というのは、同じホール内で同時に進行している別の研究発表の声がきこえてきてわずらわしく思った。しかし、学会というものに出席する場合、どの研究発表

にも興味がありみんな聴いてみたいという人は少ないであろうし、いくつかの限られた研究発表だけを聴いてみたいというのが普通であろうから、いくつかのテーマに関して同時並行発表というこの新方式はそのような選択活動には便利であると感じた。しかし、自分が聴きたい研究発表が二つも三つも同時に並行で行なわれてしまうときには、いくつかを聴きのがしてしまうという難点もあると思う。

さて、この方式の一番のねらいであると思われるface-to-faceの接触やコミュニケーションをはかるという点に関しては、従来方式におけるように研究結果の一方的報告のような形式が多かったというのが私の感じである。少なくとも、発表している本人は完成された研究を報告しているつもりの人が多かったようだし、集まっている人たちもそれを当然としておとなしく聴いているというような雰囲気であった。すなわち、同時並行進行ということだけが新方式なのであり、ひとつひとつの発表現場での進行ぐあいは従来方式と大差ないという感じであった。しかし、この新方式を採用することの当初の触れ込みでは、学会を完成した研究を発表する場としてだけでなく、“半製品”に対して広く意見を求め、よりよい解決への道を開く場にもしたいということではなかったか。発表者にも聴衆にも、新方式のこの主旨はあまり理解されていなかったのではないか。それに、新方式には誰もまだあまり慣れていなかったということもあるであろう。ほとんどの人が、この新方式は同時並行発表により、単位時間当たりの発表量を増大するという効率改善策であり、その発想は能率主義から生まれたものと理解していたのではないだろうか。

私は、やはり、この方式のほんとうの主旨は、face-to-faceのコミュニケーションの輪を近くし、生き生きとしたアイデア交流の場を創り出す点にあると理解したい。だいたい、会場のつくり方からして、コミュニケーションの輪を促進するようになっていなかった。発表者の机が前に置かれ、それに向かって、教室で生徒の椅子が教だんに向くようにいっせいに並んでいた。あんなふうに並べられたら、やはり、発表する人も半製品を語るのははずかしい。なんとか完成したものを報告しているような顔を失たくなってしまう。コミュニケーションの輪をつくりたいなら、椅子の並べ方も机を真ん中に囲んで輪になるように並べたらどうだろうか。

私は1969年秋に、フロリダ州マイアミでのアメ

リカ OR 学会にでたが、そのとき、やはり、この同時並行方式をとっていた。各発表場所では、ひとつのテーブルを囲んで椅子が並べられていた。まん中のテーブルは、必ずしもまるくはなかった。発表者は自分の学校や研究所で書いた working paper のようなものをもってきて、集まったひとにくばったり、オーバーヘッド・プロジェクターで説明していた。working paper は普通、学会雑誌に発表する前に、下書き、あるいは、たたき台的に書く論文で、それをほうぼうの研究者に読んでもらって意見をきいたりするのに使われている。アメリカ OR 学会での同時並行方式発表会場は、ホテルの大宴会場かダンスホールのような大ホールをつかって十数組が同時に進行していた。各発表者の持ち時間は 40 分ぐらいだったが、これを二つに分割して、2 回同じ発表をしていた人もいた。これは、聴衆がいくつかの発表をきくために、かなり動きまわるからである。先日の日本 OR 学会秋季大会では、ほとんどの聴衆はどれかひとつの発表に 45 分間固定していたようで、発表者も持ち時間の 45 分間ほとんどひとりでしゃべっていたひともちいた。そして、時間を超過したり、時間がたりないような様子のひともちいた。

以上、私が出席してみた先日の秋季大会の新方式と 3 年前のアメリカ OR 学会のそれとを簡単に比較したが、どちらのほうがかかったといっているのではない。秋季大会の新方式は、学会研究発表会を情報とアイデア交流のよりよき親しみの深い場とする前向きなステップであることは事実であるし、その方向へ向かって今後いよいよ充実されるであろうことを期待しているしだいである。

(青山学院大 高森 寛)

自由な雰囲気と個性的な研究

冬期オリンピック後できれいに整備された札幌市街の西のはずれにある厚生年金会館のデラックスな会場で、1972 年秋期 OR 学会が開かれました。

筆者は第 2 日目、9 月 26 日(火)の午前(9 時 20 分~11 時 35 分)、R 室における研究発表の座長に当てられました。

この時間帯では R 室と Z 室で並列に行なわれ、R 室が主として理論的な面、Z 室が応用的な面の発表でありました。さらに今回の新方式によりまして、R 室内は A, B, C の 3 ブロックにわかれ並列に研究発表が行なわれ、どのブロックにも自由に出入りができるようになっております、いわゆる夜店方式が

とられたわけです。

研究発表は持時間 40 分で、各ブロックで 3 件ずつ合計 9 件の発表が当該時間帯の R 室で行なわれる予定でしたが、A ブロックの梅林光寿さんがご病気欠席のため中止したほかは、すべて予定どおりに行なわれました。

A ブロックは DP 中心のもので、DP ではベテランの小田中さんや坂口さんのご発表でありましたが、なんといっても、裏番組の C ブロックでは整数計画関係のものが行なわれて、そこに興味の中心が集まったために、入りはあまりよくありませんでした。といっても最低 10 名弱は確保したでしょう。

B ブロックはグラフ理論関係で、防衛大の松井甲子雄さん、早大電気通信大学院の篠原正明君など、いずれもグラフ、ネットワーク解析に情熱を燃やしている若手研究者の発表でした。このブロックの異色篇は、西田俊夫さん、竹田英二さんの“Fuzzy グラフ”の研究でした。不勉強な筆者には目新しい話題でたいへん興味をもちました。第 1 日の R 室でも工大の塚本さんの“Fuzzy 積分”の話がありましたが、このような新鮮な話題は OR を活気づけるものでしょう。

C ブロックが現在の OR の理論面での中心課題である整数計画関係の発表があり、大入りでした。30 名強は集まったでしょうか。慶大の安西さん、京大の茨木さんなどいずれも新進気鋭の研究者です。整数計画にはいつも人が集まります。これは整数計画への要求度が高いということと、まだ満足すべき解法が得られていないことを意味するでしょう——10 年ほど前 Gomory の解法が出たときには決定打と思いましたが、このブロックではこのほかに、非線形計画のプログラムパッケージの研究発表が東芝の中野、山下さんと、MP 関係ではもうかなりのベテランである小野勝章さんとの協同で行なわれました。

以上筆者の担当となりましたところをみたわけですが、第 1 日目の R 室の研究発表もあわせて考えますと(特別テーマである“公共性と OR”に関する発表は別としまして)、今回の OR 学会での発表は自由な雰囲気と個性的な研究が多かったことを感じます。そしてこれは今回に限らず OR 学会で筆者が つねに感ずるところです。

研究とは、たとえささやかなものであっても、つねに自由であり個性的なものであるべきだと思います。これは自明なことだとは思いますが、OR のよ

うに企業と結びつきやすい学会では、とかく学会が企業の宣伝の場のようになるところも多いという噂です。そのような場では、大企業の物量や組織の力強さに圧倒されて、弱々しい個人の、学問を愛でる心、未知なものへのあこがれ、探究心の芽生えがつまとられてしまうおそれがあります。OR学会がこ

のような場に陥いることなく、その節を守っていることを喜ばしく感じたいです。

おわりに筆者の不便をよく補助していただいた国鉄の佐藤幸一さんに感謝いたします。

(早大 高橋啓郎)



47年度論文審査委員

47年度の“経営科学”および“*Journal of the Operations Research Society of Japan*”の投稿論文の査読は、次の方々をお願いいたしました。

竹内 啓	阿部 俊一	千住 鎮雄
出居 茂	真鍋龍太郎	森 雅夫
森村 英典	牧野 都治	高橋 啓郎
鍋島 一郎	朝尾 正	山本 正明
嶋田 正三	児玉 正憲	成久 洋之
古林 隆	山田 孜	鈴木義一郎
西田 俊夫	宮沢 光一	岸 尚
飛田 武幸	深尾 毅	片岡 信二
坂口 実	柳井 浩	橋田 温
三根 久	阿部 統	篠原 正明
浅野長一郎	藤沢 武久	下城 康世
本間鶴千代	伊理 正夫	新沢 雄一

(以上順不同、敬称略)

会 合(47年12月～48年1月)(かっこ内は出席者数)

第6回理事会 48.1.24(17) 議題 1. 第5回理事会議事録の承認 2. 支部規約案の件 3. 事務局員増員の件 4. 48年度予算案, 事業計画案の一部修正の件 5. 48年度総会スケジュールの件 6. 春季研究発表会プログラム案の件 7. 学会誌の販売契約案の件 8. 学会誌作成契約案の件 9. 事務委託契約案の件 10. 役員改選の件 11. 日本工学会入会の件 12. 入退会の件 13. IFORS 関係について 14. 学会より講師派遣の件 15. 経営情報開発協会研究奨励金の推薦の件 16. 研究部会の新設の件 17. 除名者の件 18. その他

広告委員会 47.12.4(3)

IFORS 常任委員会 47.12.14(6); 48.1.13(7)

IAOR 委員会 47.12.19(4); 48.1.25(3)

IFORS 財務委員会 47.12.21(3); 48.1.16(4)

研究普及委員会 48.1.19(14)

会員増強委員会 48.1.26(4)

庶務幹事会 47.12.6(9); 48.1.18(10)

編集幹事会 47.12.19(7); 48.1.23(7)

会計幹事会 48.1.16(5)

国際幹事会 48.1.23(3)

研究普及幹事会 48.1.30(7)

入退会(47年11月7日より48年1月23日まで・1月24日第6回理事会にて承認)

入 会

〔正会員〕

石鍋正夫(東洋製罐)・石川徹也(図書館短大)・岩本誠一(九大)・上田太一郎(三菱電気)・上村益稔(人間機能開発研究所)・内堀光正(国鉄)・上野洋二郎(東京農工大)・大見孝吉(通産省工業技術院)・加地郁夫(北大)・葛原悠二(防衛庁)・茅陽一(東大)・川島弘尚(慶大)・紀一誠(日本電気)・久保田洋志(広島工大)・小山健夫(東大)・小林正和(日本科学技術研修所)・小泉重信(建設省)・佐藤至(防衛庁)・佐伯 胖(東京理科大)・桜井正友(防衛庁)・最相 力(日本アイビーエム)・沢崎守孝(ヤンマーディーゼル)・渋谷正一(明治ゴム化成)・下総 薫(東大)・鈴木三枝子(法政大)・鈴木道子(日本科学技術研修所)・寺本和幸(愛知工業大)・出牛正芳(専修大)・遠坂 登(協和醸酵)・富樫 栄(千葉工業大)・戸高和夫(センチュリ・リサーチセンター)・中瀬令子(日本興業銀行)・西川智登(都立工科短大)・二宮 保(九大)・沼田 久(小樽商大)・野尻 寛(沖電気)・榎谷 有三(北大)・南 容子(日本科学技術研修所)・村